

横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）

澤 護

本稿は横浜開港から居留地制度が廃止される明治32年までの約40年間に、どのようなフランス人経営のホテルがあったかを調査し、その沿革と共にそこに点在する多くの事蹟を明かにすることを目的としている。

フランス系ホテルといっても、終始一貫してフランス人が経営したホテルもあれば、経営の行き詰まりから他国の人の手に渡ったもの、途中から出資をして、やがて経営権を握っていくようになるものなど実に多彩である。これらの面は、当時の新聞記事を丹念に調べ、さらに来日した旅行者の手記などをも傍証として使い、可能な限り正鵠を得たものとなるように努めた。

これまで、本邦に於けるホテル史の類の書はなん冊かあるが、そのいずれも多くの誤謬が認められ、とりわけ設立年など年月に関しては実に問題が多い。このため、フランス人経営のホテルにとどまらず、他のホテルに言及しなければならなくなる点多々ある。

外国人居留地という特異な社会の中で、どのようなホテルが開業され発展していったのか、それがこの特殊な環境とどう関わりあっていったのか、そこに見え隠れする人間はどんな人たちだったのかは興味あるテーマで、ひとりフランス系ホテルだけを眺めるだけでは片手落ちの面もでてくるため、一応ここに存在した全てのホテルを洗ってみた。

1859年（安政6年）より1899年（明治32）までの40年間に、横浜居留地にあったホテルは大小あわせて120軒ほどであったが、この中にはホテルの建物それ自体は同じものでありながら、経営者の代わるごとに名称が更

新されたものも少なくなく、ホテルそのものとしては100軒弱で、1年平均では12・13軒が存在していたに過ぎなかった。

1859年のホテル

日本が開港した折、上海や香港より一獲千金を夢見る大勢の外国人が横浜にやってきた。彼らのために、まず多くの簡易食堂やそれに伴う安宿が開店されたと想像されるが、これらの事柄は一切知られていない。

ところが、明治25年に太田久好編の『横浜沿革誌』が刊行され、この中の安政6年(1859)の項に「本町通ニ寺院ノ如キ平家一ヶ所、堅瓦・海鼠壁ノ平家ホテル一カ所建築成レリ」と記述され、1859年にはすでに瓦葺きで海鼠壁の立派なホテルがあったことを示した。

太田久好のいうホテルがどのような名称のものであったのか、また彼の記録が正しかったのかを確認するのに、かなりの日時を費やすことになったが、結論的にいえばこの年代の本格的なホテルはまずあり得ないということであった。この年代のホテルの存在を否定する根拠はいくつかあるが、まず1860年代に来日した旅行者が、だれひとりとしてこの立派なホテルに宿泊せず、後に述べるように窓もない8部屋からなる一階建てホテルに滞在している事実、また開港場の神奈川から横浜への移転を強硬に反対していた各国代表団が、渋々ながらも横浜居留地を認め、この地への建築を承認し、本建築を始めるのが1860年に入ってからのことだったことなどによる。

それでは横浜居留地の最初のホテルはどのような名称で、その開業はいつだったかということになるが、これはオランダ帆船「ナッソウ」号(Nassau)の船長であったフーフナーゲル(C. J. Huffnagel)が建てた「横浜ホテル」で、その開業は1860年2月24日のことであった。¹⁾「横浜ホテル」はフランス人が経営に参加することはなかったが、このホテル内にフランス人経営の店が併設され、またホテル史の上から極めて重要な点が多

いので、まず「横浜ホテル」の紹介から本題に入ることにしたい。

「横浜ホテル」

1860年2月24日に開業した「横浜ホテル」がどの程度の規模であったのか、これを示した記述がふたつある。ひとつは1860年9月にオイレンブルグ伯（Friedrich Eulenburg）の率いるプロシアの東アジア遠征隊に、主に経済事情を視察する目的で、旗艦「アルコナ」号（Arkona）に便乗し来日したザクセン商業会議所全権のシュピース（Gustave Spiess）が残した旅行記であり、もうひとつは、この東アジア遠征隊の公使に起用されたオイレンブルグの公式資料による遠征記の二書である。後書では横浜を「Yokuhama」と表記し、さらに「Yokuhama-Hotel」としているが、本稿では「横浜ホテル」に統一しておいた。今の眼からみると、「Yokuhama」の表記は奇異に映るが、東京がTokei、箱館がHakodadiと外交文書でもよく表記されているだけに、発音通りに書き示したのだろう。「横浜ホテル」の開業を知らせる新聞広告でも、「YOKUHAMA HOTEL」として掲載されている。

シュピースらの乗った「アルコナ」号は、1860年9月4日に入港し、彼らは先ず江戸の赤羽根にあった接遇所に宿泊していたが、横浜に「それ相応のホテル」があることを知らされると、横浜に移る決心をした。

この9月16日、シュピースら3人は江戸から7時間を費やし、目的のホテルに到着したが、彼によればこのホテルは「フフナーゲル・ホテル」（das hotel Huffnagel）という日本家屋のものであった。

「このホテルそのものには、他の日本の木造作りの家屋とは違って、非常に風通しのよい、いわゆる食堂とそれと同じ特徴を備えたビリヤード室があったが、バー、つまり船などの放浪客のための酒場もあった。この地でたったひとつしかないこのビリヤードは、かなりの賑いをみせ

ていた。刺激というものは、人間にとっては実に必要なものであるらしく、一ドルか半ドルを賭けた一種の賭球で満足されていた。

ふたつの広間は長い本館の側面に立ち、部屋と称する板囲いの八つの小室となっていて、狭いベランダから下の方に向かって通路があり、床上一フィート半の高さがあった。

窓はひとつもなく、また同様にストーブもなかった。このふたつがないため、湿冷の11月には、大雨が降ったり強風が吹き荒れたりするので大層つらかった。

家具といえば、一種のベットとがっちりしたテーブル、それと二脚の支那の竹製椅子があるだけであった。²⁾

シュピースの描く横浜の「フフナーゲル・ホテル」はなんとも荒寥殺伐としたもので、しかも部屋と称する寝室は、板で仕切っただけの急拵えの小部屋であり、窓ひとつなくランプでの生活であったから、夜ともなると賭けビリヤードを楽しむか、ホテルに付随した怪しげな男たちのたむろすバーで飲み騒ぐしか術がなかったのだが、それでも旅行者は満足してここに滞在していた。例え、不満に思ったところで、他に宿泊するホテルは他になく行き場がなかったのだから、いかんともしがたかった。シュピースらにとっては、こんなホテルであっても赤羽根の宿泊所より住み心地はよく、かなりの期間このホテルに居を構えることになったのであった。

一方、オイレンブルグが乗船した「テーティス」号 (Thetis) は、1860年9月12日に神奈川の入江に投錨したが、彼ら一行は神奈川・横浜にではなく江戸に滞在した。オイレンブルグらは、この10月7日に横浜を訪れ、ここで滞在中のシュピースらと再会した。

「われわれは、仲間が当時建築中であった横浜ホテル (Yokuhama Hotel) にいるのに出会った。このホテルはかつて船長をしていたオラン

横浜居留地のフランス系ホテル (1863-1899)

ダ人が建てたもので、そう設備がよいとはいえないが、彼らは満足して宿泊していた。このホテルの建物の前面はすでに着工され、この冬中には完成する運びになっていた。三方に、一階建ての家屋の立つかなり広い中庭には、多くの建築資材が野積みされたままだった。一方は食堂で、それに付随してビリヤード室と酒場があり、向い側には小さないくつかの居間と寝室とが連なっている。その背後、中央の建物と向かい合せて建っているのが厩舎である。すべてが急拵えの板張りで、半ば日本風、半ばヨーロッパ風の設備である。(このホテルの) なにもかもが、当時はいまだ即製の歳の市の酒場のようであったが、調理場と地下室はよくできていて、ホテルの主人も信用のおける感じのよい男であった。給仕はめいめい(客が)自分たちでやった³⁾

ふたりの描写からこのホテルを再現してみると、1860年中はなおも建設中で、まず八つの窓のない小部屋と広間からなる一階建ての木造で、その側に食堂とビリヤード室と酒場があった家屋が別に付随し、厩舎が中央建物の裏手にあったことになる。横浜居留地最初のホテルとしては実にもの淋しい姿で、この段階では横浜居留者の大きな楽しみとなるボーリング場はまだ併設されていない。

「横浜ホテル」は居留地70番に建てられたが、その後の模様を伝える記録としては、フランツ・フォン・シーボルトの子息アレクサンダー・フォン・シーボルトの紀行『最終日本紀行』⁴⁾、1849年5月のドレスデンの蜂起「五月革命」でかのバクーニンと旧知の間柄となったハイネの書⁵⁾(因に、このバクーニンも1861年8月から9月にかけてこのホテルに滞在した)、イギリス公使館に落ち着くまでの間、なかなか住まいが決まらず、約2ヵ月このホテル住まいを余儀なくされたアーネスト・サトウの日記などがあるが、⁶⁾ これらを紹介する紙幅はない。

フフナーゲルの「横浜ホテル」は、1863年10月27日に横浜での最初の奇

術・手品ショーが催されたのを最後に売りにだされた。この時には開業時に一台しかなかったビリヤード台が4台に増え、さらにボーリング・アレーが2台併設されていた。

1863年11月26日の公開入札でこのホテルを手に入れたのは、この頃上海に居留していたカリエール (G. H. Carrière) という男で、彼は早くにホテルの再開を望みながらも内装などに手間どり、そのオープンは翌1864年2月20日にずれこんだ。この新しいホテルも「横浜ホテル」の名称のまま、また地番も同じ所であったが、この年の3月には理容院が、さらに6月1日よりレストランがホテル内に開業されていった。

このレストランの経営者がフランス人のヴァシャルド (Vaschalde) で、初めて「横浜ホテル」と関わりを持つことになったフランス人だった。ヴァシャルドの経営したフランス・レストラン「ア・ラ・ヴェリー」(à la very) は、二部屋からなるもの静かな雰囲気から、落ち着いたところと歓迎され、ここで提供されるアイスクリームや食事は居留民には喜ばれた。⁷⁾ 殺伐とし、時にはピストルの弾が飛びかうホテルであったことから、再開の時には女性も安心して立ち寄れる場所にして欲しいとの要望もだされたが、この時になって初めてホテルとしての機能をそなえることになった。しかし、このレストランは1864年中だけでもペレ (Adian Pellet)、ダメール (Louis Damele) などに代替りをし、長くは続かなかった。

1866年11月26日、横浜は未曾有の火の海に包まれた。俗にいう豚屋火事だが、この火災により「横浜ホテル」は完全に焼失した。この折り、経営者のカリエールは上海へ旅行中であったが、12月に横浜に戻った彼は二度とホテル業に手をだすことはなかった。

1860年から1862年にかけてホテルと名のつくものは「横浜ホテル」が唯一のものであったが、1862年に入って「横浜ホテル」の酒場の責任者であったジャマイカ生まれの黒人・マコーレー (James B. Macaulay) が独立し、居留地86番に居留地で2番目に古いホテルを開いた。このホテルは

横浜居留地のフランス系ホテル (1863-1899)

「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」(Royal British Hotel) という大それた名前を持つもので、喫茶室とボーリング場を伴ったもので、その開業は当初の予定より3ヵ月ほど遅れた1862年10月25日のことであった。⁸⁾ このホテルは1864年8月30日に閉業し、この10月より「コマーシャル・ホテル」と経営者を新たに再開されていくことになった。

1863年に入ると、新しいホテルとして「オテル・デュ・ジャポン」(Hôtel du Japon) と「アングロ・サクソン・ホテル」(Anglo-Saxon Hotel) がオープンされ、横浜居留地はこの年に4軒のホテルを数えた。先のホテルがフランス人経営のホテルで、居留地では3番目の、フランス人としては最初に建てられたものであった。

CHATILLON has the honor to inform
Visitors and the Public that
he has opened
A NEW HOTEL
on the French Concession,
where they will always meet those desiderats
in such establishment,
Quality, Confort and Convenience.

① 「オテル・デュ・ジャポン」

1863年9月26日から1864年4月2日にかけての新聞広告に、図版で示した「新しいホテル」の開業が報知されている。⁹⁾ この広告では、ホテル名もまたその場所も明記していないが、これはシャティロンが開いた「オテル・デュ・ジャポン」と断定してよいかと思う。

その根拠のひとつに、広告にある「フランス租借地」がある。1860年5月10日(万延元年閏3月20日)、フランスの初代総領事ド・ベルクールは、横浜居留地の分割に関し五ヵ国均分案を提案して、居留地のほぼ中心に当たる9, 10, 30, 31, 60, 61, 80および81番の地所6,733坪の貸与が認めら

れ満足の意を表わした。これらの地番は飛び離れた番号のため理解しにくいであろうが、小径を挟んだ地続きで、当時はフランス地域と呼称された一帯であった。

しかし、これらの地番に「新しいホテル」ができた形跡はなく、居留地が手狭になって新たに埋め立てられた沼沢地、およそ2千坪の地所 (Swamp Settlement) の一角にこのホテルが建てられたとみなさなければならなくなってくる。このホテルのあった地番の決定は必ずしも容易ではないが、次のふたつの記録が大きなヒントになろう。

1864年1月20日、ロス (T. J. Ross) は居留地97番に婦人用品、靴、煙草などを商う雑貨店を開いたが、この店は「オテル・デュ・ジャポン」の向い側¹⁰⁾にあった。この97番には他に洋装店や洋酒店が開店され、さらにロス自身の手で「オテル・ド・リョーロップ」(Hôtel de l'Europe) がオープンされていく地番でもある。

「オテル・デュ・ジャポン」が97番の向い側にあったとすれば、そこは本村通りを挟んだ新しい埋め立て地で、80番の地続きとなる168・169番付近ということになる。日本に初めてサーカスを披露し、サーカス団の解散後に、そこで使っていた馬を利用して、乗馬学校を設立した男にリズレーという男がいた。この人物もまたホテル稼業に手をだすようになるが、彼が1864年5月に乗馬学校を建てた地番は102番で、「オテル・デュ・ジャポンの向い側、オテル・ド・リョーロップの隣り」¹¹⁾であった。さらに、もう少し後に掲載されるリズレーの広告では、168番の「グラン・カフェ・デュ・ジャポン」の向い側としている。これらの点から、シャティロンが開いたホテルは「オテル・デュ・ジャポン」で、その地番は168番だったと判断して間違いはない。

「オテル・デュ・ジャポン」そのものの規模や様子を語る記録は一切なく、しかも1864年5月27日にシャティロンが横浜を去ってしまったために、極めて短期間その名を残しただけのホテルであった。

168番（明治3年以降は187番）は、その後フランス人が経営する洋酒店、パン屋などが開かれたりするが、水屋や瓦屋で名を成すジェラルが1864年9月に先ず食料品店を開業したのが、この地番だった。ジェラルは主に中国人を住ませる長屋も所有していたから、これがホテル廃業後の家屋だった可能性が強い。¹²⁾

② オテル・ド・リョーロップとオテル・デ・コロニー

居留地97番で雑貨商を営んでいたジョゼフ・ロスが、この場所に新しいホテルを創業した。真赤なカーペットを敷きつめたサロン、読書室や談話室を伴い、6台のビリヤード台を配した部屋、雰囲気の良いバー、清潔な家具付きの寝室18室とからなる「オテル・ド・リョーロップ」は、とりわけフランス人コックの料理を楽しめることでも評判となった。¹³⁾

1864年5月15日をめどにオープンを目指していたが、内装などに手間どり約40日遅れた6月25日に開業された。この日は丁度51番でも「タイクーン・ホテル」（大君ホテル）が開業された日であったが、この方は男性客専用のホテルであったのに対し、ロスのホテルは家族連れにも開放され、美容院も併設されていくといったように、「横浜ホテル」と並ぶ本格的なホテルの誕生であった。

道を挟んだ向い側に「オテル・デュ・ジャポン」（日本ホテル）があったため、このホテルより遥かに立派だとばかりに、「オテル・ド・リョーロップ」（欧州ホテル）と名付け宣伝に努めたのである。経営が順調に進めば、近い内に部屋数を30室に増やし、大規模なホテルにする計画を持っていたロスではあったが、負債がたまり新規開業からわずか3ヵ月でホテル経営から手を引き、賃貸しにだすことになった。

この折りに借り受けたのがふたりのフランス人・ラプラス（A. Laplace）とミシェル（Michel）で、彼らはこれを「オテル・デ・コロニー」（Hôtel des Colonies、植民地ホテル）と改称して、この年の11月1日

に開業した。¹⁴⁾しかし、ふたりは翌年の2月にはこのホテルから手を引き、別の地番に引っ越してしまったため、97番の「オテル・デ・コロニー」はわずか3ヵ月たらずその名を残しただけで終わった。

その後の97番のホテルは、再び「オテル・ド・リョーロップ」として再開され、1866年に「インペリアル・ホテル」と名称が変更されていった。

③ オテル・デ・コロニー

1864年10月2日に上海より横浜にやってきたフランス人のコック・ラプラスは、ミシェルと共同で97番のホテルを賃貸して借り受け、「オテル・デ・コロニー」をオープンしたものの3ヵ月後にはここを去った。この理由は、さらに場所的に便利で広々とした建物へということであったが、これは表向きの話で、実際にはロスの経営する雑貨店が不振であったため、持ち主のロスと借り手のラプラスとの間に、いろいろとごたごたがあったことだったとみなされる。

ふたりが97番のホテルから移転した先は、80番のカトリック教会の裏手から、155番のイギリス領事館事務室（後のイギリス刑務所）に至る途中の本村通り164番の一角で、その名も元のまま「オテル・デ・コロニー」として、1865年2月15日にオープンしたのであった。¹⁵⁾

居留地164番の植民地ホテルは、一般の宿泊客を泊めるホテルとしてではなく、月極めの長期滞在者を相手にしたホテルであった。開業当時の宿泊費が月極めで45ドルと非常に高いので、なにか施設に特徴があったホテルとみなしたいところだが、小ぢんまりとしたビリヤード室があった程度で、これといった目立ったものはない。

この月極め料金45ドルはすぐに30ドルに割り引かれ、夏場はアイスクリーム、シャーベット、プディングなどが賞味できるようになり、このホテルは大いに好評を博すようになっていった。アイスクリームだけを例にとると、コーヒー、バニラ、木いちご、桃、すぐりなどと多彩で、好み

横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）

によってはプロンビエールさえ特注できただけに、コックの腕の方は確かなものがあった。

一般に日本人が初めてアイスクリームを賞味したのは1865年のことで、横浜居留地でもこの年にアイスクリーム・サロンなる店が開かれている。もっとも、これより早い1863年10月には、フランスへ赴く池田筑後守一行がフランス郵船の中でこれを食卓にだされ、「氷に卵を和し砂糖を加味せし珍物を玉盤に盛り出さし、一匙の甘味得も云はれず」（「欧行記」）と歓喜した記録もある。

「オテル・デ・コロニー」がオープンした164番の地所は三区轄に別けられ、それぞれ200坪強の敷地で、いずれもフランスに貸し与えられたところであったから、フランス人の動向が多い。1867年8月には、51番で店を開いていたジュール夫人（Euzière Jules）の美容院がこのホテル内に移転し、さらに1869年に入ると、ボナ（L. Bonnat）の経営するレストラン「お菓子の城」（Sweetmeat Castle）も開店し、ホテルは一段と充実をみせていった。

ボナがここにレストランを開いた段階で、ホテルの所有権はラプラスよりボナに移譲され、彼は1871年後半までこのホテルの経営を続けたものとみなされる。ところが、ボナは明治5年2月13日（1872. 3. 21）から同19日までの一週間、邦字新聞に広告を掲載し、164番より55番に移転してホテル業を続ける傍ら、仕出しも仕り候と公示した。この広告は、55番にボナの経営するホテルがあったことを証明しているのだが、どうもその存在は疑わしい。先に、問題の広告を掲げてみる。

「 御披露奉申上候

私儀、是迄百六十四番にてホテル渡世罷在候處、日増に繁昌仕、冥加至極難有仕合奉存候。然處、此度本町通五十五番へ引移、猶右渡世励、御料理の儀ハ極製風味専一に仕、座敷ハ勿論、諸道具に至迄美を盡し、

精々下直に相働，御僉末無之様仕候間，猶不相替多少に不限，御用向被仰付，御引立の程偏に奉願上候。何方様迄も仕出し仕候。(句読点は筆者)

本町通五十五番 ホテル館 ボナ¹⁶⁾」

日本人の手に成った広告だけに興味ある一文となっているが，広告文中に164番から55番へ移転を衆知しているものの，新しいホテル名を明記していない点がきにかかる。先の広告から，55番にボナ・ホテルが開業されたはずだと単純に思い込んでしまいたくなるが，どう調査しても55番のホテルの存在は実証できない。ボナ自身は1871年（明治4）中には18番の「インターナショナル・ホテル」の経営者に収まってしまうので，55番のホテルの方は邦字新聞に一週間ほど広告をだただけで，開業までには至らなかったとの見方をしないわけにはいかない。1872年や1873年版の複数の居留者名簿（ダイレクトリー）でも，55番のホテルは伝えていないのも傍証になる。

居留地164番の「オテル・デ・コロニー」は1864年11月1日より1871年のある時期までであったが，ボナが手を引いたことにより終焉を迎えた。なお，築地居留地にも「オテル・デ・コロニー」が開かれたが，この方はフランス人・ベグュー（Louis Bégueux）ら，かつての164番のホテルのコックたちが開いたものであった。

164番ホテルの最初の持ち主であったラプラスは，1870年に一度フランスに帰国したが，再来日するもまたもホテル経営に乗りだした。一方，ボナの方は「インターナショナル・ホテル」や「グランド・ホテル」など，いくつものホテルに関わっていくことになるが，ふたりの動向は先に触れることにする。

1865年中に横浜居留地にあったホテルは大小合わせて11軒であったが，1866年には9軒，1867年には8軒と減少傾向をみせ，1868年は6軒にまで

横浜居留地のフランス系ホテル (1863-1899)

なった。これらのホテルは、「コマーシャル・ホテル」、「オテル・デ・コロニー」、「ベルリン・ホテル」、「グローブ・ホテル」、「コスモポリタン・ホテル」と「ベイ・ビュー・ホテル」で、いずれも小規模のものであった。1866年から1868年にかけての3年間、フランス人が新規開業したホテルはなかった。

④ インターナショナル・ホテル

1864年の秋に来日し、「コマーシャル・ホテル」などさまざまなホテルの持主となり、肉屋を開業し、戸塚にお茶屋を開き、日本人女性を妻としたイギリス人・カーティス (W. Curtis) は、居留地18番の海岸に面した518坪の地所に新しいホテルを建築させた。1868年暮れに開業された「インターナショナル・ホテル」は、二階建て石造りの本格的なもので、茶箱広重といわれた二代広重・喜齊立祥の「横浜海岸通十八番異人旅宿之図」で、当時の瀟洒な景観を偲ぶことができる。

1871年後半になって、「オテル・デ・コロニー」の持主ボナが共同経営者となり、18番のホテル内にレストラン「スイートミート・キャスル」をオープンした。しかし、後述するように1872年中にボナは新しいホテルの経営に専念するようになったため、カーティスとの共同経営はまもなく解消された。「インターナショナル・ホテル」の長い歴史の中で、フランス人が経営に参加したのはこの時だけであったが、料理人としては3人のフランス人がいた。

1875年代、横浜では「インターナショナル・ホテル」が最高級のホテルで、1872年にできる「グランド・ホテル」をも凌ぐほどだったので、料金の方も高く一泊で3ドル、月極め二食付きの最低料金が60ドルもした。しかし、料理の方は定評があり、ここでフランス料理の腕の冴をみせたのが、東洋一のコックとの評判をとるフランス人のミュラール兄弟であった。

ところが、1877年に入ると経営不振に落ち入り、いくつかの食堂、ビリ

ヤード室と32室のベッド数を有するホテルは売りにだされたりもした。¹⁷⁾ いく度かの経営危機を乗り越え、1881年1月1日に施設の充実を図り、ミュラール弟に代え、シェフとして「オテル・デュ・リュニヴェール」の経営者だったフランス人のガンドーベールを迎え、ホテル名を「ウィンザー・ハウス」(Winsor House)と改めて再出発したのだった。¹⁸⁾

「ウィンザー・ハウス」は1886年に入ると、20番の「グランド・ホテル」との合併の話し合いがもたれ統合されていたが、ここに顔をだした3人のフランス人料理人は、その後もあちこちのホテルのシェフとなり、さらにホテル経営に参画する人たちでもあった。なお、「インターナショナル・ホテル」がオープンした直後に、ここに宿泊したドイツ女性の旅行記¹⁹⁾などから、このホテルの様子を知ることができる。

⑤ マリーン・ホテル

1870年(明治3)初め、イタリア系フランス人とみなされるジアレット(Julien Giaretto)が、居留地41番の一角に「マリーン・ホテル」(Marine Hotel)を新しく開いた。この地所は300坪強の敷地があったが、この年代には他に炭酸水製造所など3軒の家屋が建てられていたので、規模としては小さなホテルであった。波止場に近いところに位置していただけに、名前が示す通り船員相手の簡易旅館とか下宿を意図したものだったようである。

1875年までこのホテルはここにあったが、この間の記録によっては「オテル・ド・ラ・マリーヌ」(Hôtel de la Marine)とフランス語で表記したものもある²⁰⁾ので、どちらの名称でも呼ばれていたのであろう。料理人にはフランス人のブラン(Josephe Brin)やグルフィエ(Theodoro Greffier)が雇用されていたが、料理が美味しかったとか、部屋が清潔だったとする旅行者の回想はない。

ジアレット夫妻は1873年に一時離日し、再び横浜に戻ると1874年6月に

横浜居留地のフランス系ホテル (1863-1899)

居留地73番に主にフランス商品を商う店を開いた。「マリーオン・ホテル」の方は経営者が代り、「カンブリアン・ホテル」となったが、この新しい名称のホテルは1876年1月初めに閉業したため、1年ほどその名を残しただけだった。

ジアレットの方は居留地80番の店舗を借りてフランス製香水などの販売をしていたが、1877年9月に入りドイツ領事館の前にあたる61番で「パンション・ブルジョワーズ」(Pension Bourgeoise)という下宿を始めた。しかし、このパンション経営を軌道に乗せることはできず、同じ年に45番に移転すると、またも雑貨店を開いた。

ジアレット夫人はよほどホテル経営が好きだったものらしく、1879年2月10日にこの45番の店舗を改築し、またも同じ名称の「パンション・ブルジョワーズ」を開いた。²¹⁾この45番は先の41番より地の利が悪く、しかも60坪たらずの敷地内に三つの家屋の立つところだったため、この商売も1年あまりで閉業に追い込まれてしまった。

このパンションの月極め料金は30ドルで、たとえワイン込みだったとしても、こう高くては借り手もなかなかつかなかつたろう。因に、この時期の「グランド・ホテル」の月極め料金は40ドルであった。かくして1880年6月17日に、ジアレット夫人は夫と2人の子供と共に横浜を去った。²²⁾

⑥ オリエンタル・ホテル (84番)

1871年から1872年にかけて18番の「インターナショナル・ホテル」の共同経営者であったボナは、1872年秋にジャクモ商会の責任者・ジャクモ(John Jaquemot)の住まいがあった居留地84番に、「オリエンタル・ホテル」(Oriental Hotel)を開業した。

このホテルの規模を伝える記録はないが、開業時の84番には6軒の住宅や事務所もあったので、初めから大きなホテルであったとは思えない。しかし、1875年にはここで居留者の新年会が開催されたり、また旅行者の紀

行文にも現われるようになるので、建て増しなどがなされた模様である。

1875年1月3日、居留地80番で火災が発生したが、幸い大事に至らず最小限の被害で済んだ。²³⁾この折、丁度「オリエンタル・ホテル」での集いに出席する予定の人たちが火災現場を通りかかり、消火に協力したのであった。もう少し燃え広がると、このホテルも極めて危険な状況になるところだっただけに、無事に鎮火したことを知ったボナは上機嫌で、彼がフランスから持ち帰ったばかりの上等のワインを会合の出席者に振る舞った。この頃の「オリエンタル・ホテル」は、居留者の間ではむしろ「ボナ・ホテル」と親しみを込めて言われることの方が多く、これを受けて新聞記事に「ボナ・ホテル」と書かれたりもしている。

1875年9月、マルセイユを出航して東洋への旅にでたデュラン・フェルデル夫人は、上海、長崎、神戸などを見物しながら、1876年3月に横浜に上陸すると、この84番のホテルに宿をとった。

「私たちはいま、とてもきちんと整頓されたホテルで、すっかりくつろいでいます。このホテルの主人はボナ氏というフランス人ですので、そのため私は満足していることを認めないわけにはまいりません。²⁴⁾」

同じフランス人同志ということで気楽にした夫人は、「グランド・ホテル」のような大きなホテルとは違い、落ち着いた家族的雰囲気なこのホテルに好意をみせた。このような雰囲気が好きで、イギリス領事館員の勧めもあって、ここに泊まったイギリス女性にイザベラ・バードがいた。

彼女は1878年5月21日にサン・フランシスコから横浜に着き、この12月19日に香港へ向うまでの約7ヵ月日本に滞在した。その間の数ヵ月、彼女はひとりの若い日本人通訳を連れて、東北・北海道を踏査した。幕末以来、蝦夷地を旅した外国人は大勢いたが、彼女のように日高国・門別や佐瑠太、室蘭から長万部に至る礼文華峠越えをした人は他にいなかった。特

横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）

に、礼文華峠は1年に数人の役人か脚夫が通るだけの交通の最大の難所であったから、この峠越えだけに4日間もかけて通り抜けたのには驚嘆の他はない。

バードは横浜に到着すると、すぐその足でイギリス領事館に向かい、静かなホテルの紹介を求めた。ここで推薦されたのが84番のホテルであった。サン・フランシスから同船した旅行者が、みな海岸通りの大きなホテルに泊まったのに、自分が小さなホテルを選んだのは、同じ船の乗客たちのおしゃべりから逃げるためだったと、後に彼女の紀行『日本に於ける未踏地』²⁵⁾で書いている。

バードは山手居留地のヘボン夫妻の家や、東京のイギリス公使館に宿泊したこともあって、「オリエンタル・ホテル」に滞在したのは5月21日と22日の2日だけであった。このためホテルについての印象は特になく、持ち主はフランス人であるが一切を中国人に任せていること、給仕頭の日本人は態度が実に丁重であることだけを書き印しただけだった。実は、この頃ホテルの主・ボナは、横浜一のホテル「グランド・ホテル」の経営権を握ろうと、その獲得にやっきとなっていた時であったから、バードのいうように経営を中国人に任せているとなったのであろう。

ボナの経営する「オリエンタル・ホテル」は1878年6月まで続いたが、ボナは「グランド・ホテル」の買収に成功したことで、先のホテルの方をこの6月10日に閉め、ペイル兄弟会社に譲渡した。フランス人のペイルは1年後にこのホテルを再開することになるが、これは⑪の「オテル・ペイル・フレール」の項で記述しておく。

なお、1865年（慶応元）にはドイツ人の経営した「オリエンタル・ホテル」がすでに横浜居留地にあり、さらに同名のホテルが後日オープンされてもいくので、この名称のホテルについては年度や地番に注意する必要がある。

⑦ グランド・ホテル

居留地20番には1870年（明治3）にイギリス人が経営した「グランド・ホテル」があったが、これを取り壊わして新しいホテルの新築工事が1872年に始められた。新規開業したホテルも「グランド・ホテル」と称し、日本最大のホテルへと発展していったことから、1870年のホテルの方は完全に無視されてしまったまま今日に至っている。

新しい「グランド・ホテル」の開業は、下記に掲げた新聞広告からこれまで1873年9月10日とみなされてきた。しかし、後述するように開業日には問題があるが、先ずその広告を掲げておこう。

「廣告

今般拙者儀當港二十番に於て旅館を開き、諸事欧州之例に倣ひ家具美麗を盡し、萬器清潔を極め、専ら諸客の便利に注意し、欧米諸國之旅館と毫も異なるなし。且食事ハ常食非常食の兩種に分ち、精々入念調理仕候。尤非常食ハ四人より百人に至るまで、御誂ひ次第急速出来仕候。且館内ハ御好に隨ひ入御覽候間、貴賤貧富に拘らず賑々敷御光来奉希候。（句読点は筆者）

海岸二十番 グランドホテル主人²⁶⁾」

この新聞広告が明治6年9月10日付けの新聞だったことから、9月開業説がでるところとなったのだが、他にもうひとつの理由もあった。日本に於けるホテル史を調べようとすれば、まず最初に目を通す文献は、昭和21年に運輸省が編纂した『日本ホテル略史』だろう。この書の「グランド・ホテル」の項をみると、次のような記述になっている。

「明治六年九月、横濱海岸通り二十番に佛國人ボンナ（BON NAT）、料理長ムラオー（L・MURAOUR）をパートナーとしてグランド・ホテル

開業す。

建物木造二階建

一階——食堂，読書室，料理場

二階——客室三〇室位」(前掲書 10・11頁)

このふたつの記録を受けて、多くの既刊書は「グランド・ホテル」の開業時を明治6年9月とし、その持ち主を「ボン・ナ」と「ムラオー」だとして紹介してきたが、後者の記述はほとんど訂正しなければならない。簡単にその誤りを指摘すると、本稿ですでに書いたボナが、「グランド・ホテル」と関わりを持つのは明治11年(1878)以降のことで、明治6年中は84番の「オリエンタル・ホテル」の経営者であった。

一方、もうひとりのフランス人・ムラオーとはレオン・ミュラール(Léon Muraour)のことで、彼がこのホテルに関係するのは明治10年と20年の一時期だけだった。むしろ彼の弟・ポーラン(Paulin Muraour)の方が付き合いが深く、ボナが経営に乗りだした時の料理長は弟の方であった。レオンは明治7年3月に伊豆沖で起きたフランス郵船・ニール号(Nil)の遭難事故の際に、救助された4名の内のひとりであった。²⁷⁾この事故では、乗客・乗組員合わせて90名もの犠牲者がでた。つまり、ホテルの開業時には、レオンは横浜には滞在していなかったのである。さらに、建物の「木造二階建」は石造り2階建てとしなければならず、記述の大半は問題がある。残念なことだが、基本資料として利用されることの多い『日本ホテル略史』は誤謬が多く、参考にする側は必ず再調査をしなければならない。

居留地5番の「横浜ユナイテッド・クラブ」の支配人を長い間勤め、数々の公共事業に尽したイギリス人のスミス(W. H. Smith)が、写真家のベ아트(Felix Beato)ら数名の資本家と資金をだしあって新築した「グランド・ホテル」の開業は、従来の定説となっていた9月10日より25日も早

い、1873年8月16日の土曜日であった。²⁸⁾

この夜は盛大な祝賀会が催され、大勢の招待客はさまざまな近代的設備に驚嘆し、豪華で美味しい料理に舌鼓を打ってはホテルの開業を祝い、その前途は洋々で成功疑いなしとスピーチしたのであった。

この時の経営陣は、W. H. スミスをマネージング・ディレクターとして全権限を彼に与え、リオンズ (John Lyons) を支配人に選び、シェフには東京の「オテル・デ・コロニー」にいたベギューを迎えるといった顔ぶれだった。開店当初の宿泊料金は、月極め二食付きで60ドルだったが、これは他のホテルの倍に近い額であった。例えば、箱根の「富士屋ホテル」が外人客用の施設を備えて宿泊させた時の金額は、月極め食事付きで35ドルであった。

「グランド・ホテル」は一般旅行者が宿泊できたのはもちろんだが、長期の滞在者も多くいた。例えば、お雇い外国人などは日本政府が招いた大切な人たちであったから、彼らに適当な家を提供できるようになるまでは、ホテルに住まわせることもあったのである。駅通寮に雇われ、明治8年の外国郵便創業に尽力したブライアン (Samuel Bryan) は、1874年10月に妻と子供を連れて再来日したが、この折には彼のための宿舎が横浜郵便局の一角に建てられるまで、「グランド・ホテル」に長期滞在させていた。

1875年(明治8)に入り、ホテルの経営陣の一部に変化が生じた。この年の4月、支配人・リオンズに代って、ロンドンの「ランナム・ホテル」で敏腕をふるったボエル (Chas. Boël) がその任につき、7月にはシェフのベギューの後任としてポーラン・ミュラールがやってきた。この年の秋には、新しいビリヤード室もできあがり、また各国から取り寄せた新聞・雑誌を数多く閲覧できる読書室も完備して、きめ細かなサービスがみられるようになった。

1876年、これら支配人と料理長の顔ぶれがまたも代り、かってフランス

商社（Maron & Co.）で働いていたレイノー（J. Reynaud）が新しい支配人となり、シェフの方はガンドーベール（G. Gandaubert）がその任につき、フランス人による経営が続けられることになった。ところが、1年もたたない内に新しい顔ぶれによる経営はかなりの負債がかさみ、かなり危険な経営状態に陥っていった。

この頃、「グランド・ホテル」への出資者は80名ほどであったが、1877年の暮れに大手の出資者のひとりであったベアトが、自分の資金を引き上げ、「1878年1月1日以降、グランド・ホテルに関わるいかなる負債に責任を負はない²⁹⁾」と公示したこともあって、債券所有者の間ではかなりの動揺が生じた。このため、有志による挺子入れが行なわれたものの好結果につながらず、結局ホテルの全施設はバーン商会（Bourne & Co.）の手で、一般公開のオークションにかけられることになった³⁰⁾。

1878年（明治11）6月1日に開かれた入札会で、このホテルは22,100ドルでヘマート（J. von Hemert）の手に落札されたが、実は彼は代理人で、実の入札の成功者はボナであった。新しくこのホテルの持ち主となったボナは、6月10日よりホテルの開業をすることを広告したが、施設の手直しに手間どり、再開は7月1日にずれこんだ³¹⁾。

ホテル全体を修繕し、家具等を新調して再開業した時の経営者はボナ、彼の親友であったジーカーノ（Pierre Zicano）とミュラール弟の3人で、月極め宿泊料金を赤・白ワイン付き40ドルとやや割り安に押さえてのオープンだった。すでに記述してきた通り、明治6年夏に開かれた「グランド・ホテル」は、まずスミスやベアトラ主にイギリス人の資本によって発足し、明治11年になってフランス人の手に渡ったわけで、これまで定説化されてきたように、初めからフランス人の手で開かれたホテルではなかったのである。

ボナの経営する「グランド・ホテル」は、そう長くは続かなかった。この頃、健康を害していたボナは転地療養を勧められ、しばらく横浜を離れ

フランスで静養に努める決心をしたからである。これまでも何度か一時帰国したことのあるボナは、その旅を必ずフランス郵船で行き来したものであったが、今回は途中の東南アジアやインド洋での猛暑を懸念し、フランス郵船が就航する東洋航路の旅を諦め、アメリカを経由する旅程を選んだ。

1879年（明治12）5月16日、O. & O.社の「オセアニック」号に乗船したボナは横浜港を後にしたが、この時2度と日本の土を踏むことがなくなろうとは思いだにしなかった。17日の所要日数で太平洋を渡った同船は、6月1日に無事サン・フランシスコに入港した。

余談になるが、横浜からサン・フランシスコに至る船舶の最短所要日数は15日で、幕末から1879年までの20年間で4回記録されている。この内の3回までもが、この「オセアニック」号が記録を作っているだけに、同号はなかなかの快速船だったことになる。

サン・フランシスコに到着したボナは、ここから大陸横断鉄道を利用しニューヨークへ向かったが、長途の旅の疲れからニューヨークに着いた時には、とてもパリへ発つ健康状態ではなく、この地に一時滞在を余儀なくされた。しばし静養に努めたものの、健康はついに回復することもなく、7月に入って彼はこの地の土に帰った。

ボナが横浜を去った後のホテル経営は、ジーカーノとミュラール弟のふたりに任せられ、ボナ亡き後も「ボナ商会」所有のホテルという形式をとっていた。彼らふたりは1880年7月には15馬力の蒸気船を建造させ、横浜港に船を浮かべて船上納涼パーティを企画したり、横浜港一周の散策コースを設けたりして客の評判を呼んだ。また、1881年5月にはゆったりとした喫茶室を新しくホテル内に設けるかたわら、アメリカより「エクリップス」（日食）とか「モナルシー」（君主制）といった変った名称をもつ高級ビリヤード台を輸入したりしては、ホテル施設の充実に心掛け、利用客の要望に答えていた。なお、この頃の「グランド・ホテル」での昼食は平均して1ドル（1円）で、夕食は1ドル25セントであった。

横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）

1880年代に入ると、「グランド・ホテル」で旅の疲れを癒した旅人の紀行文はかなりみられるようになるが、そのいずれも単にこのホテルに宿をとったと書き留めているだけで、ホテルの規模や外観、同宿の旅行者、料理といった面にまで気を配って書き残したものはみあたらない。

1881年夏、当時としては極めて珍しいコースであったシベリアを経由し、パリから来日したコトー（Edmont Cotteau）の一文で代表させるが、彼の描くホテルの様子も実にそっけない。彼はウラジオストックから長崎に着き、ここでP. & O.の「マラッカ」号に乗り換えて横浜入りをはたした。

「（マラッカ号の）錨が海底に着くか着かないうちに、われわれの乗った船にはグランド・ホテル所有のランチがもう横着けされていた。荷物が運び下ろされる。われわれ旅行者はわずかだったので（筆者注 この時の1等船客はコトーを含め5名、2等室はこの船になく、3等室を欧米人が利用することはなかった）、全てがすぐに終わった。数分後に税関に着いたが、ここでは非常に丁寧だがそれでいて極めて厳しい日本人税関吏が、われわれの荷物を入念に調べた。ホテルは目と鼻の距離で、4時にはこの快適な建物の2階にある広くて綺麗な一室で私は身を落ち着けていた。³²⁾」

コトーの描写はわずかこれだけで終るが、9月に訪れた箱根・宮の下の「富士屋ホテル」と「奈良屋ホテル」の叙述は実に細かい。日本旅館での初めて受ける接待や体験はもの珍しく、完全に西洋式の「グランド・ホテル」とでは、受ける感動がまるで違っていた。

1879年にボナが去った後の「グランド・ホテル」は、ジーカーノらの手で経営されていたが、1881年12月に所有権は「ボナ商会」より「ボワイエ商会」に移り、ジーカーノはホテルから手を引いた。「ボワイエ商会」

の責任者ジョゼフ・ボワイエ（Joseph Boyer）は、12月21日にフランス領事館にホテル取得の届け出を済ませ、ミュラール弟とコーザン（Marcelin Causan）を共同経営者として、三者による「グランド・ホテル」が1882年1月1日より再び始められることになった。³³⁾ 三代目のホテル経営者ということになる。

彼ら3人による共同経営は、コーザンが1年たらずで去ったため、代りにベルギー人のムールロン（E. Moulron）が新しく経営者として加わった。しかし、彼も3年ほどでホテルから手を引いたため、1884年5月よりボワイエとミュラール弟ふたりによる経営が、1886年まで続けられることになった。

1886年、ホテルの隣接地18・19番にあった「ウインザー・ハウス」（「インターナショナル・ホテル」）の改称）が、「グランド・ホテル」に統合・合併される話し合いがもたれ、ハウスの所有者であったウォルフ（L. Wolf）が経営者として参加することで決着をみた。この3人による経営は、最終的に「ボワイエ商会」が手を引く1889年（明治22）まで続いた。

「グランド・ホテル」の経営に加わったフランス人は1889年以降はいないので、後の沿革を簡単に記述しておくに留める。この年ホテルは大きな変貌をとげることになった。つまり、18・19番の「ウインザー・ハウス」の跡地に新館を建て、その経営を会社組織の元で行なうというものだった。旧館の右隣りに新館を増築する当初の計画は若干修正され、海岸通りからみて旧館裏手にあたる地所にも増築する拡張案が取り入れられ、1889年秋に工事にとりかかった。翌年5月の観光客の多い時期を狙って新館オープンを予定したが、実際の開業は予定より少し遅れた6月末のこととなった。ここで、1873年8月にオープンされ、スミス、ボナ、ボワイエと続いた個人の手による「グランド・ホテル」の経営は終焉を迎え、新しい「グランド・ホテル」が誕生したのだった。

ところで、「グランド・ホテル」旧館の設計者は、アメリカ人建築家のブ

リジェンス (R. P. Bridgens) ではないかと言われている。彼は1865年(慶応元) 3月23日に来日し、1891年(明治24) 6月9日に77歳で横浜で逝去するまでの間、横浜税関、横浜町会所、新橋駅、横浜駅などを設計した人物である。彼の作風は華麗さや優雅さはなく、どちらかといえぼずんぐりとした単調な建物が多かったので、この平面的で飾りがなく、変化に乏しい旧館の設計もブリジェンスの可能性が極めて強い。

増築後のグランド・ホテル

1889年夏、新築計画が本格化し、横浜在住の建築家サルダ (Paul Sarda)、ピヨン (Françoise Pillon)、ダイアック (J. Diack) らに見積書の提示を求めたところ、サルダの見積書が最も安く、結局ホテル側は彼に企画・設計を依頼することにした。ホテルの手直しや開業が当初の見込みより約2ヵ月遅れたことにより、設計・監督料などの支払いで、ホテル側とサルダとの間で訟訴事件に発展していった一幕もあった。

新館のオープンにより「グランド・ホテル」の保有する部屋数は、旧館と合わせて360室だとこの頃の新聞に書かれている。なお、新館の工事費は約3万8千ドルであった。明治20年代の横浜居留地の大手のホテルとしては、87・88番の「オリエンタル・ホテル」があった程度で、これが1894年(明治27)に焼失してしまった後は、「グランド・ホテル」だけが格式あるホテルとして居留地を代表していた。

横浜の賑わいの中心であった「グランド・ホテル」は、日清戦役で急増する外国人を見込んで増築し、後に何度かにわたって建て増しがなされたため、迷路のような廊下があちこちに行き交い、初めて泊った客が自分の部屋から正面玄関に行くまで、それはまるで遠足だと書いた手記もある。また、1893年(明治26)にここに泊った旅行者によると、部屋に入るとすぐに洋服・靴の注文取りがきたり、骨董品を売り込む業者が顔をだしたりしてわずらわしかったが、入れ墨の勧誘は興味深いものだったとしている。

つまり、外国人旅行者は日本に来た記念を記録に残すため、この好機を逃がさず進んで入れ墨で体を飾ったという、ホテルでくりひろげられた様子の一端を紹介している。

このホテル新館についての記録は多く、ホテル内での自殺さわぎ、ボヤさわぎなど話題にこと欠かないが、フランス人が関与したのは設計や企画の段階だけで、経営参加することはなかった。設計者・サルダの他に、フランス人のピヨンが設計・企画に加担したにすぎなかった。³⁴⁾

日本最大を誇り、数々の歴史を刻んできた「グランド・ホテル」も1923年9月1日の大地震で壊滅し、その上、火災を起こしたため巨大な石の廃墟と化してしまった。なお、現在海岸通りにある「ホテル・ニュー・グランド」と、ここで述べた「グランド・ホテル」とはなんの関わりもない。

⑧ オテル・ド・リュニヴェール

1874年（明治7）居留地にあったホテルは9軒を数えたが、この内の2軒が新規開業のホテルで、いずれもフランス人が経営するものであった。それが⑧と⑨とで示すホテルである。

1874年6月27日、居留地187番（明治3年以前は168番）に「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」（Hôtel et Café de l'Univers）という長い名称をもつホテルが開かれたが、³⁵⁾この名前はすぐに「オテル・ド・リュニヴェール」（Hôtel de l'Univers）に改められた。ホテル経営者はアンドリー（E. Andries）とガンドーベール（G. Gandaubert）のふたりであったが、後者の人物は神戸居留地でホテル経営をしたり、「ウインザー・ハウス」の料理長だった男である。

建築費に1万4千ドルを投入しながら、一泊料金は75セント、2食にワイン付き月極め料金は40から50ドルと、やや押え気味で発足した。この設備投資が大きな負担となって、翌1875年には経営悪化となって現われ、ホテルの全施設は競売業・フレッチャー商会の手で、6月1日に公開オーク

横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）

ションで処分されると報じられた。³⁶⁾ところが、このホテル所有者のひとりであるガンドーベールは、この5月28日に新聞公示をして、6月1日より14日までの2週間ホテル内部の改修のため休業をし、以降は彼ひとりの手で経営を続けると発表した³⁷⁾ので、ホテル経営や処分をめぐるなにかやらかい混乱が生じていたようである。

このような状況の中で、ガンドーベールはまずホテル一階のレストランとビリヤード室を1875年6月19日にオープンし³⁸⁾、客には金時計、イヤリング、ネクタイ・ピンなど数々の商品が当たる福引きを目玉に来訪者の関心を惹こうとした。毎週日曜日には、料理に「カン風牛胃の煮こみ」を提供するなど工夫も凝らしたが、一度傾いたホテルの立て直しは容易なことではなく、半年後の12月15日には遂に閉業に追い込まれ、ガンドーベールはホテルの経営を断念した。

4台のビリヤードが置かれたサロン、ふたつの食堂、大きな酒場、読書室、9つの寝室などを含む木骨石造り2階建てのこのホテルは、1876年1月20日に入札にかけられることになった。³⁹⁾ところが、1876年1月20日の新聞広告をみると、このホテルは新しい名前のアングリン（James R. Anglin）により、売り・貸し広告となって掲載されている。⁴⁰⁾

表面的に眺めると、1月20日の公開競売でアングリンがこのホテルを落札し、その日の内に彼によって再び売りにだされたことになる。しかし、アングリンは長い間にわたって日刊紙「ジャパン・ガゼット」や「ファー・イースト」紙に携わり、1876年代はガゼット紙の経営者で、ホテルに手をだしたことは一度もなかった。したがって、1月20日の競売は不調に終り、新しい買主が現われるまで自社の新聞で広告するようになったものと判断される。

この年の2月15日には再びバヴァン商会の手でホテルは入札にかけられ、結局ヴィバット（B. Vivat）、ジロー（E. Girault）、カイエン（Caillens）の3人に落札された。3人の共同によって経営されることになったホテル

は、まず3月25日にビリヤード室と喫茶室だけがオープンされ、さらに4月1日にレストランが開店されていったが、ホテルの開業まで漕ぎ着くことはできなかった。複数の人による共同経営は失敗をきたすことが多く、彼ら3人の場合も1年ほどで破綻を生じ、名前にはホテルが入らない「カフェ・エ・レストラン・ド・リュニヴェール」で終わった。

1877年（明治10）に入り、またしてもこの建物は売りにだされ、6月27日の入札で手に入れたのがデネオー（J. Denéaud）であった。彼はこの日のオークションで、評価額の10分の1ほどの1,300ドルで落札すると、旧名の「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」を用いてホテルの経営に乗りだした。このホテル名だが、前の持ち主であるカイエンとデネオーとの間で持ち上がった家具の価格からの裁判事件での記録には、単に「オテル・ド・リュニヴェール」とあり、また「カフェ・ホテル・ド・リュニヴェール」（Le Café-Hôtel de l'Univers）と表示した新聞広告もある。

居留地187番カトリック教会の裏手に位置し、メイン・ストリートからさほど離れていない本村通りにあったので、ホテルの場所としては決して悪くはなかったが、デネオーの経営するホテルも思わしくなく、1879年6月に彼はこれを賃貸する意向を示した。しかし、このホテルはその後なかなか借り手もつかないまま開店休業が続き、1880年暮れに火災によって消滅した。翌1881年にこの地番に新しいホテルが再建され、またも同名の「ホテル・ド・リュニヴェール」と称したが、これは⑭で述べる。

⑨ オテル・デュ・ルーブル

先に、1864年居留地97番にあった「オテル・デ・コロニー」は164番に移転し、その持ち主がラプラスであったことを記述した。彼はボナにここを譲渡すると、一時フランスに帰国した。

164番のホテル経営者・ボナは、1871年に18番のホテルの経営者として去ったために164番の方は空き家となった。このホテルを「オテル・

横浜居留地のフランス系ホテル (1863-1899)

デュ・ルーブル」(Hôtel du Louvre)と改称して開いたのが、再び日本に戻ったラプラスであった。このホテルの明瞭な開業日は不明だが、1874年中であったことは確かで、この年の4月の新聞広告に金時計を紛失したので、拾得者は上記ホテルに連絡されたいとあるだけに、1874年の春オープンということになる。

「オテル・デュ・ルーブル」は、1875年1月28日に居留地の中心であった60・61番の新しい建物に移転し開業された。⁴¹⁾メイン・ストリートに面した60・61番には、週に2回定期的に横浜・箱根間に乗合馬車を走らせていたコブ馬車会社や、大手の洋装店・ドリスコール商会などがあったが、1874年9月にここで火災が発生した。火災後、この敷地内に新しい店舗が共同で建設され、この12月完成した。

この新店舗に入ったのが先の2商会の他、トンプソンの薬店とラプラス夫妻の経営するホテルであった。この建物2・3階部分がホテルとして使用され、読書室、食堂、ビリヤード室を持つホテルの月極め宿泊料は2食付きで40から50ドルであった。

ラプラス夫人が1876年9月に横浜を去ったこともあって、後に残ったラプラスはホテルの経営を断念し、この11月にこのホテルは居留地から消えた。したがって、「オテル・デュ・ルーブル」の名称は1874年春から1876年秋までの2年半あっただけで、その場所は164番と60・61番の2ヵ所であった。なお、このホテルは1876年12月1日から、さまざまなホテル経営を手懸けたカーティスにより、「カーティス・ホテル」として登場することになる。

⑩ インターナショナル・カフェ・レストラン・ホテル

1876年中に居留地にあったホテルは、前年より1ヵ所増えた12軒であったが、この年フランス人の経営する新しいホテルが現われた。

すでに触れたルイ・ベギューは、居留地81番の一角にハムやソーセージ

を主とした豚肉加工品を販売する店をまず開き、同時にレストランも併設したが、これに宿泊設備も整え「インターナショナル・カフェ・レストラン・ホテル」(International Café, Restaurant=Hôtel)と称して多角経営に乗りだした。1876年(明治9)11月のことである。⁴²⁾この長い名称を持つホテルは、「オテル・アンテルナショナル」と一般に呼称されたが、わずか半年で閉じられたため、その規模などを伝える資料はない。

ベギューはもともと腕の立つシェフとして居留地で知られた男で、1871年(明治4)当時は東京・築地居留地18番の「オテル・デ・コロニー」の経営者のひとりだった。1873年に入り、横浜居留地20番で新規開業されることになった「グランド・ホテル」の料理長として招かれ、東京より横浜へ住まいを変えた。彼はこのホテルで約1年半働くと再び東京に戻り、竹川町12番地に1875年の春「カフェ・レストラン・アンテルナショナル」という喫茶店を開いた。彼の作るケーキやクッキー類は築地居留地に住む人たちには好評で、彼はさらにハム、ソーセージ、豚の足、豚の胃や腸を味付けした臓、パテなども製造・販売していた。

竹川町12番のレストランは、この5月に隣接する14番に移転し、これを増・改築して11月より月極めの下宿も手懸けるようになった。ベギューの経営したペンションは月30ドルであったから、この値段は横浜居留地内のペンションとほぼ同じ相場であった。しかし、このペンションも1年たらずで閉ざされてしまい、その様子を伝える記録は全くない。ただ、この頃に発行された東京名所案内などの小冊子で、「万国亭」として紹介されたりしているのが、ベギューのレストランである。

1876年夏までベギューの店は竹川町にあったが、築地居留民の人口は頭打ちとなり、人物往来の烈しい横浜の方が商売には向いていると判断した彼は、この秋に横浜に戻って前に住んだ81番にまずパン店を開業した。1876年11月7日のことであった。この店に東京で馴染となった名前を付け、「インターナショナル・カフェ・レストラン・ホテル」と称し、レスト

横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）

ランと宿泊施設を備えていった。

居留地81番は1,421坪もの広い地番で、1876年にはドイツ領事館があった他に、ボーリング場、簡易旅館、スナックなど何軒もの小さな店舗があった場所だけに、新橋駅から徒歩数分の所にあった「万国亭」に較べると店の格は落ちる印象は拭えない。

ベギューが1876年後半に開いた81番のホテルは、わずか半年間その名を留めただけで、1887年5月2日には売りにだされることになった。これには、ベギューがこの夏より3年契約で、「横浜ユナイテッド・クラブ」の料理人として雇用されるという事情があったことだが、下宿に毛がはえた程度のホテルでは経営が成り立たなかったろう。

⑪ オテル・ペイル・フレール

1878年におけるホテルの数は、前年より3軒増えた14軒となったが、いずれも改称したりして誕生したもので、新規開業されたものはなかった。ここで述べるホテルも、⑥の「オリエンタル・ホテル」を改称したものであった。

フランスのモーリィで大きなパン店を開いていた「ペイル父子商会」のサミュエル（Samuel Peyre）とジャン（Jean Peyre）の兄弟が1875年来日し、この12月17日に居留地80番でペイル・フレール商会を設け、主に洋菓子を商う店を開いた。

居留地80番はこれまでも触れてきた地番だが、ペイル兄弟商会が店を開いた時には天主登（フランス・カトリック教会）が聳え、その周囲には洋服店、写真館、喫茶店など小さな店が軒を並べ、本町通りを挟んだ向い側には「オテル・デュ・ルーブル」が開業中であった。この地番と同じ並びの84番にはボナの経営する「オリエンタル・ホテル」があったが、ボナは1878年6月に「グランド・ホテル」の経営に乗りだしたため、84番のホテルをペイル兄弟に譲った。

1878年6月24日に手狭な80番から広々とした84番の店舗に移転したが、⁴³⁾兄弟はすぐにはホテル業に手をださず、ここでもパイなど洋菓子の製造・販売を続けていった。次の年に入り、ユージェーヌ (Eugène) とジュール (Jules Peyre) の兄弟がさらに来日すると、彼らは洋菓子店に喫茶室を併設し、「オテル・ペイル・フレール」(Hôtel Peyre Frères) をオープンした。1879年(明治12)6月15日のことであった。⁴⁴⁾1881年6月にはホテルの傍らに、「ジャルダン・デテ」(Jardin d'Été 夏庭園) という軽食やアイスクリームを、そよ風を受けながら楽しめる庭園を開くなどして、ペイル兄弟のホテル経営は順調に続いた。

ペイル兄弟には先の4人の他にもうひとりマチュー (Matieu) がおり、彼も後に来日したが、長いこと日本に留まり、フランス海軍の御用達店として酒・食料品の輸入・販売に力を入れ、大きな店舗にしたのはユージェーヌだった。

1882年12月4日、ペイル兄弟は隣接地85番に新しい菓子店を開き移転したことで、ホテル業から完全に手を引いた。したがって、「オテル・ペイル・フレール」は、1879年6月より1882年11月までの2年半の間、84番にその名を残しただけであった。

1881年6月1日、イギリス人のアーサー・クロウが来日し、1年以上にわたって内陸を旅し、帰国してから1冊の書を刊行した。⁴⁵⁾この中で、著者は「オテル・ペイル・フレール」に泊ったことを記述しているが、ホテルの規模や様子については全く触れていない。ただ、あちこちの日本旅館を泊り歩き、米と卵の食事にうんざりし、ノミがむらがる布団に悩まされて再び横浜に戻った彼は、ホテルでだされた洋食と快適なベッドに安堵した様子を語っているだけである。

「オテル・ペイル・フレール」はホテルとしてより、むしろレストランの方が横浜はもちろん東京に住む欧米人には有名であった。ここで提供されるコーヒーは、他では味あえない本格的なものであったから、誰れもが

横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）

この店のコーヒー豆をなんとか手に入れたいものと願っていた。裏から手を回して、主人のペイルに頼み込んでも、なかなか豆は譲ってもらえなかったという。

このホテルの隣り85番の一角に、ビンセント夫人 (Mme. Vincent) の経営する洋装店があった。この店は主に婦人と子供向けの洋服と用品を商っていたが、いつも在庫が豊富というわけではなかった。このため、フランス船が入港したりした後には、最新流行のドレスや帽子を求めに東京からも大勢の婦人が訪れ、店内はごった返えした。ここで洋服選びをし、隣のペイル・フレールの店で美味しい食事を満喫し、おしゃべりをするのが彼女たちの大きな楽しみであった。

勝海舟の三男・梅太郎と後に結婚することになるクララ・ホイットニーは、再三にわたってペイルのレストランで食事を楽しんだことを語っているように、この店は上品な女性連れが集まり、彼女たちの間では「グランド・ホテル」のレストランより人気があった。一方、「グランド・ホテル」の食事の方は、紳士や家族連れのたまの贅沢に利用された。

ペイルの店からほど近い80・81番には、なん軒もの喫茶店やパブが密集していたが、こちらの方にはやや客層の落ちる女性たちが集まった。これら女性を目当てに船乗りらがたむろし、口論や喧嘩は日常茶飯事で、ひどい時にはコップの投げ合いから始まり、店全体を完全に壊わされてしまった気の毒な店さえあった。

なお、84番のホテルは1883年には「テンペランス・アンド・ファミリー・ホテル」となり、イギリス人の手で経営されていった。

⑫ チボリ・ガーデンズ・ホテル・アンド・レストラン

1880年における関内居留地のホテルは14軒だが、この年の7月20日に山手地区では初めてのホテルが誕生した。山手地区には下宿を営んだ人も多くいたが、ホテルと名の付くものはこれまでなかった。

1880年5月、フランス人・ミシェル（A. Michel）は、山手68番に落ち着いて読書ができる喫茶店「チボリ・ガーデンズ」をまず開き、⁴⁶⁾ここで軽食を提供して月極め宿泊者のための部屋を用意し、7月に「チボリ・ガーデンズ・ホテル・アンド・レストラン」（Tivoli Gardens, Hotel & Restaurant）としてホテル業を始めた。⁴⁷⁾

この山手68番はヘフトがビール醸造所を開き、さらにヴィーガンドがババリア・ブルワリーを興した有名な場所で、1,300坪もの広大な地所であったが、その一角をミシェルがヘフトより譲り受けたところであった。

しかし、このホテルは一夏限りで終わり、ミシェルは再び元の商売・洋酒輸入販売業を手懸けることになった。

⑬ オテル・（エ・レストラン）デ・コロニー

1880年10月8日、パデル（Henri Padel）とデシャネル（A. Deschanel）のふたりのフランス人は共同出資をし、3年の契約を結んで本町通り52番に「オテル・エ・レストラン・デ・コロニー」を開いた。⁴⁸⁾この地番は367坪で、この年代には他に6軒の家屋があったから、ホテルとはいえ規模の小さなもので、どちらかといえばパテ、ブーダン、ガランティヌなど主に豚の腸詰が自慢のレストランの方に力が注がれた。

パデルは一時期134番にあった横浜フランス郵便局で働いていた人物で、この局長デグロンが1881年4月24日に帰国する際に、パデルも行動を共にし一時横浜を去った。このため、ふたりによるホテル経営は解消され、4月11日以降はあとに残ったデシャネルひとりの手で運営され、ホテル名は「オテル・デ・コロニー」と改められた。⁴⁹⁾

デシャネルは1875年夏に箱根にあった「オテル＝レストラン」の経営に加わり、また、居留地84番の「オリエンタル・ホテル」のシェフをしていて、料理人としての腕は確かなものがあった。しかし、この52番の「オテル・デ・コロニー」は1883年9月初旬をもって閉業されてしまい、この

横浜居留地のフランス系ホテル (1863-1899)

10月からはイギリスにより「コロニアル・ホテル」と英語表記に改められて継続されていった。

⑭ オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール

1874年から居留地187番には「オテル・ド・リュニヴェール」があり、1879年よりはホテルは活動を停止し、この家屋の持ち主・デネオーの住いとなっていたことまでを⑨で記述しておいた。

1880年になってから、この家屋はそれまで174番で雑貨商を営んできたマントラン夫人 (Mme. Mantelin) の手に譲渡されていた。ところが、この家屋はこの年の12月下旬に類焼してしまったので、この時の火災の様子を書き残しておきたい。

横浜居留地は旧居留地に与えられた商館番号に加えて、沼地を次々と埋め立てては番号を与えていったため、隣接地でありながらかなりかけ離れた地番になっている場所がよくある。横浜に初めて上陸した外国人が、人力車で友人の家を捜すのにずいぶん苦勞した思い出を書いたりしているが、これから書くことも、当時の居留地の地番に精通したり、地図を手元に置かないことには、かなりわかりにくいはずである。

1880年12月20日の深夜、居留地としてはこの冬3度目の火災が、前田橋に近い本村通りの123番から発生した。この地番はかつて横浜と江戸とを結ぶ定期馬車を走らせていたランガン馬車会社のあったところで、この時にはジャフレーの経営する馬車屋があった。

この一帯は居留地内にあつて最も人口が密集し、一般に中国人街と呼称された地域だが、ひとたび火災が発生すると、われ先にと競って家具・調度品を狭い道に出し、そのため消火作業が遅れて、大火にしてしまうという苦い経験を過去に持つところであった。

12月20日の火元となったジャフレーの家屋は、たまたま彼が鳥撃ちでかけて不在であったが、消火に駆けつけた人たちにより、納屋にいた馬や

馬車は安全な場所に運ばれる幸運はあったものの、すぐに焼け落ちた。これと同時に124番の横浜運搬会社の馬小屋に火が付き、さらにかつて中国劇場のあった135番や136番、フランス人・パジェス (J. Pagès) の126番の住宅へと火が回っては、もう手の下しようがなく、あたり一帯は4時間以上にもわたって舐め尽くされた。

前田橋から本村通りに沿った186番までの一帯、飛び火を受けて延焼した102～104と106番、小さなホテルの建つ133番の一角が灰になった上、ドイツ人と思われるふたりの男性が犠牲になり、日本人消防隊からも多くの負傷者がでた。死亡したひとりのドイツ人は、火災も鎮火に向っていた時、不運にも「オテル・ド・リュニヴェール」の壁が崩れ落ちた折にここにいて、あっという間にその下敷きになったのだった。

この火災で焼け落ちた「オテル・ド・リュニヴェール」の所有者はマントラン夫人に代っていたが、不幸にも彼女はこの時には火災保険を掛けていなかった。しかし、この災難をものともせず、焼け跡に新しい家を建て、1881年に開業したのが「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hôtel et Café de l'Univers) であった。このホテル名だが、今まであったホテルが「オテル・ド・リュニヴェール」だったことから、この名称の方が通り相場となっていた。

1881年に新築されたこのホテルは、1888年までマントラン夫人の手で経営されていったが、その後は経営者が代りながらも1892年まで継続され、1893年に「コスモポリタン・ホテル・アンド・レストラン」に改称され、さらに「メトロポリタン・ホテル」となって1896年まで存続していった。

15年も居留地187番にあったホテルだが、ここに宿泊したとする旅行者の記録もなく、また華々しい話題もないだけに、月極めの固定客用の下宿といった印象を抱かせる。

⑮ パンション・ブルジョワーズ

居留地134番は明治初年フランスパン店が開かれたのを皮切りに、フランス人がらみの店が次々に登場する地番である。明治8年（1875）より同13年までは、駅通寮〔局〕の困惑をよそに、フランス郵便局が堂々と郵便業務を実施していた場所でもある。この局長であったデグロンが1881年（明治14）4月に帰国した後、知人のボナフー（Marius Bonafoux）がこの二階建木造家屋を改修し、6月にレストラン兼パンションを開いた。「カフェ・プロヴァンサル」（Café Provençal）とも「パンション・ブルジョワーズ」（Pension Bourgeoise）とも称したが、⁵⁰同じ年の9月初めにはこのビリヤード台やベッドは処分されてしまったので、ひと夏限りの宿であった。

なお、ボナフーは「オテル・ペイル・フレール」の腕利きのコックで、後日188番に移り、肉加工業に手をだしていった。

⑯ クラブ・ホテル

1882年の居留地ホテルは12軒と前年より2軒減少し、この数は1883年に入っても同じであった。新しいホテル名が1883年に3軒登場するが、これらはいずれも改称しただけのもので、新規開業のホテルではなかった。1884年になり、海岸通り5番に「クラブ・ホテル」が開かれ、後々までも横浜を代表し、しかも多くの話題を残していくホテルの誕生である。

居留地5番の「横浜ユナイテッド・クラブ」は1866年（慶応3）の夏に、それまであった83番のクラブが手狭になったため新築されたもので、横浜居留民の社交場となり、同時に居留地をリードする役割をはたしていた。このクラブには宿泊施設も設けられ、後にクラブの活動は専らホテル業に力を入れることになっていったが、その過程でベギューが雇い入れられたのであった。

「横浜ユナイテッド・クラブ」は1884年（明治17）1月11日に、「クラ

ブ・ホテル」(Club Hotel)として改築されオープンされた。⁵¹⁾このホテルは当初イギリス人のハーン(August Hearne)とベギューのふたりがこれを借り受けてスタートしたのだったが、一般の旅行者より月極めの固定客を相手とするペンションといった性格のものであった。

「クラブ・ホテル」は1909年(明治42)12月に火災によって焼失するまでの25年間、横浜を代表するホテルのひとつであったが、フランス人が関係したのはベギューひとりだけであった。

1884年1月のオープン時、このホテルの自慢は5台のビリヤード台とボーリング・アレーだったが、料理の味がすばらしく、また夕食時には音楽のバンドが入ることで評判を呼んだ。海岸通りに面した場所にあったから景観は申し分なく、画家のワグマンは晴れた日には望遠鏡を使えば、ここからマダガスカルや喜望峰までも望めるとおどけてみせた。

この時の部屋数ははっきりしないが、13号室が2階にあったので、せいぜい25室程度だったようである。しかし1902年(明治35)には増築され、70数室を有するまでになっていった。

経営者のひとりベギューは、1886年4月までこのホテルに関与したが、この間にあっても彼は競争の激しい横浜でより、神戸か長崎でのホテル経営を考慮していた。料理人としての腕に自信があり、先を読むことに長けた彼は、1886年5月2日に夫人とふたりの子供を連れて神戸へ向った。

神戸に到着するとすぐ、神戸税関に近い居留地122番に「レストラン・フランセ」を開き、得意の洋菓子やパン店を開き、一方で洋食店も始めた。ここでの商売は順調で、彼は神戸でも好意的に迎え入れられたこともあって、なお一層の飛躍を夢みて、仲町と京町の交差する角地に「オリエンタル・ホテル」を開業させた。1887年(明治20)のことで、その場所は80番であった。

ベギューのこのホテルは、その後に別館を新築するなどして神戸最大のホテルとして発展していったが、1896年になって彼はこれを売り払ったこ

横浜居留地のフランス系ホテル (1863-1899)

とによりイギリス人の手に渡り、株式組織をもって経営が続けられていくことになった。なお、この地にはブドゥ夫人の経営する「オテル・デ・コロニー」というフランス系ホテルもあった。

⑰ オテル・デュ・コメルス

1884年の居留地ホテルは16軒で、1885年は15軒に減ったが、この年にフランス人経営のホテルが1軒生まれた。「オテル・デュ・コメルス」(Hôtel du Commerce) がそれである。

居留地133番には長い間「クローセン・ホテル」があったが、1881年にこれは火災で焼け落ちた。このすぐ後に、同じ地番に同名のホテルが新築された。「クローセン・ホテル」は1885年(明治28)にサルディニュ(D. Sardaigne)に譲渡され、この折に「オテル・デュ・コメルス」と改称したのであった。このホテルの規模などは不明で、新築された時の新聞記事にかなり大きなものとの紹介が残されているにすぎない。

「オテル・デュ・コメルス」は1904年(明治37)までの長い間ここに存続したが、サルディニュが不在であった1887・1888年の2年間は閉ざされたままであった。かれの経営していた時のホテルは、日本郵船などに雇用されていた外国人のための宿舎といった様相で、一般の旅行者が利用するというものではなかった。

サルディニュは1909年(明治42)に横浜で逝去し、横浜外人墓地に埋葬された。この墓地の15地区の墓には、1970年代に入って死んだルイ・サルディニュの碑もあるが、この方の調査はできていない。なお、彼は177番にあった「オテル・ド・パリ」の経営に一時期ではあったが携わってはいなかった。

⑱ オテル・エ・レストラン・デュ・ルーブル

1884年頃から1890年にかけて登場するホテルは、いずれも規模の小さいものばかりで、その大半が単に改称されただけのものだった。1887年の居

留地ホテルは15軒だが、この年にフランス人の経営する「オテル・エ・レストラン・デュ・ルーブル」が開店された。

居留地128番は幕末以降、主にドイツ人が小さなホテルを建てた地番で、「ベルリン・ホテル」や「ノース・ジャーマン・ホテル」が明治初年まであり、明治9年には「ユーレカ・ホテル」が、明治16年には「ハフカーズ・ホテル」が名称を改めオープンされた。これらのホテルの持ち主はかなりひんぱんに代替りをしており、簡易宿泊所の域をでないホテルであったようである。

ドイツ人・ハフカーが1883年に128番に移転して開いたホテルは、「ハフカーズ・ホテル」と称したが、経営者が1885年に死去した後は、夫人の手で1887年まで営業が続けられた。ハフカー夫人はこの年に別の地番に転出してホテル経営を続けるようになったため、128番のホテルに空きができた。

ここに移転してきたのがフランス人のシャペル (Joseph Chappell) で、彼はこのホテル名を「オテル・エ・レストラン・デュ・ルーブル」 (Hôtel et Restaurant du Louvre) と改め、その経営にあたった。この地番に移転してくる前、シャペル夫人が162番でなん年か「レストラン・デュ・ルーブル」を開いていたので、夫人の方が実質上の経営者だったとみなされる。しかし、1888年中には閉業したので、このホテル名は単に1888年版のダイレクトリーに記録されただけだった。⁵²⁾ 1890年に52番で「横浜ホテル」を営んでいたウェールズ夫人が、このホテルの後に転居しているのをみると、1年単位で契約を結び、賃貸しされていたホテル、というより下宿屋だったとの見方ができる。

⑱ オリエンタル・ホテル (87番A)

1880年から1889年にかけての10年間、横浜居留地内では移転改称をしたホテルも含め、35軒もが新しく開業していったが、そのいずれもが小規模

横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）

のもので、横浜を代表するホテルへと発展していったものは「クラブ・ホテル」ぐらいのもので、ホテルの不毛時代であった。

1889年（明治22）は憲法発布の年で、お祝い用の提燈が1円50銭から7円50銭へ高騰したほか、物価の便乗値上げが続いた。「提灯も高い、宿料も上る」とこの時の新聞記事は揶揄した通り、ホテルの宿泊料は2倍になった。

1890年のホテル数は12軒と減少傾向をみせたが、1891年に横浜における代表的なホテルへと成長していく「オリエンタル・ホテル」がオープンした。すでに、⑥のホテルの項で同名のホテルを示し、これから先にも同じ名称がでてくるだけに、経営者名や場所に十分に気を配る必要がある。

居留地87番Aには、かつてフートが所有した「フーツ・ホテル」があり、1887年よりは「ハフカーズ・ホテル」があったが、1891年にレオン・ミュラールが「オリエンタル・ホテル・エ・レストラン・フランセ」（Oriental Hotel et Restaurant Francais）という長い名前を持つホテルをオープンした。⁵³⁾

1883年にフートが逝去したあと、「フーツ・ホテル」は年契約によって賃貸しされ、これを借り受けたのがハフカー夫人であった。彼女の手による87番Aの「ハフカーズ・ホテル」は1887年から1888年の1年ほどで終わったが、この後3年間はトムセン夫人が経営者となっていった。

レオン・ミュラールはこの間にフートの娘と結婚したこともあって、「ハフカーズ・ホテル」の賃貸しが終ると、これを改修して先のホテルを開いたのであった。この長いホテル名はすぐに「オリエンタル・ホテル」と改名された。開業当初のホテルの施設はビリヤード室、大きなバー、カードを楽しむ部屋、食堂と20室を保有するものであった。この後すぐに、ホテルの建つ87番Aの裏手と88番にも新しい建物が増築され、部屋数は「グランド・ホテル」に次ぐものとなったが、その正確な数を示す記録がないのが口惜しい。87番と88番を合せた敷地は1,078坪もあったので、

かなり規模の大きいホテルに発展していたものとの推定しかできない。

1894年（明治27）11月19日午後11時45分、火災発生の通報が「横浜消火組」に入った。大勢の消防員を召集し現場に駆けつけてみると、火災は「オリエンタル・ホテル」より発生していた。⁵⁴⁾消防隊が現場に到着した時には、すでにホテル最上階が猛火に包まれ、その炎は猛烈な勢いで下部に拡がっていた。このため、消防隊はホテル本館に付随する別館・アネックスに火が回らないよう迅速で勇敢な行動をとり、88番のアネックスへの延焼はくい止められた。しかし、4時間にも及ぶ火災は、87番Aに建つ旧館を完全に焼き尽くした。

火の回りが極めて早く、しかも深夜の火災であったにもかかわらず、第一発見者が急ぎホテルの持ち主に連絡をし、宿泊客を起こして回ったため、幸い死傷者をださずにすんだものの、火災原因の方は謎のままに終わった。

この火災により、ホテル所有者のレオン・ミュラーは87・88番でのホテル経営を断念し、より立地条件がよい海岸通りに新しい大型ホテルの新築を企画した。この新しいホテルの完成は1898年のことで、⑳で述べる「オリエンタル・ホテル」がそれである。

⑳ セントラル・ホテル

1890年以降の居留地内のホテルは大小合わせて12・13軒で、ほぼ定着している。日清戦役の影響で来遊する外国人が増加したが、横浜には1894年時大手としては「グランド・ホテル」、「クラブ・ホテル」と「オリエンタル・ホテル」だけで、これだけでは部屋の絶対数は不足だったが、新しいホテルの誕生はなかった。後者のホテルはこの年度に焼失したため、客室360余を有する「グランド・ホテル」は増築工事に着手したと「万朝報」の記事にある。

1894年、横浜居留地の中国人の数は3,500人ほどであったが、戦争に

横浜居留地のフランス系ホテル (1863-1899)

よって続々と帰国し一時は、1000名ほどに減った。この折、自分の家屋・家財に保険をかけ、自ら放火しては保険金を貪ぼり取ろうとする者が続出した。このため居留地内には夜警団が編成され、警戒にあたるという異様な年でもあった。

波止場に近い居留地179番にドイツ人の経営する「ジャーマン・ホテル」が建ったのは1880年(明治13)のことだったが、これが「コンコルデア・ホテル」と名前を換え、さらに1893年(明治26)に「セントラル・ホテル」(Central Hotel)と名称変更がなされた。この時に経営者となったのがアルノー夫人(Mme. M. Arnaud)で、この時から専らフランス人が関与することになった地番である。

「セントラル・ホテル」は、1904年(明治37)までの約10年間ここで営業が続けられたが、1899年からはドゥートルランジュ夫人(Mme. Françoise Doutrelinge)やヴェリセル(L. Verissel)へと代替りしているのをみると、2年単位の契約で賃貸しされていたホテルであったらしい。ここには、後日さらにフランス人・コット(L. Cotte)が経営する「オテル・ド・パリ」(Hôtel de Paris)がオープンされていくことになるが、次々と名称を改めながら30年近くもホテルが179番にあったのは、大棧橋から2ブロックの距離という地の利にあった。

「セントラル・ホテル」時代の広告では、長期滞在者には特別料金、バーとビリヤード室のある1級ホテルと宣伝しているものの、料金や部屋数を明示した記録はない。明治20年後半の食事付き一泊料金は3～5円で、部屋代と食事代とを切り離して支払う西洋式とは違ったため、日本で宿泊料を安く上げるのは難しいと、多くの旅行者は嘆いている。

② オリエンタル・ホテル (11番)

1898年(明治31)、居留地は新しい2軒のホテルを迎えたが、いずれもフランス人経営の新築されたものであった。この年度のホテル数は、この

2軒を加えて13軒であった。

居留地87番の「オリエンタル・ホテル」を火災で失ったレオン・ミュラールは、海岸通11番に横浜一のホテルの建築を図った。当時の邦字新聞は力を込めてこう報じている。「目下横濱居留地には二十番グランドホテル、五番ホテル等数館あるが、比回尚ほ八十七番館の佛人ムララー氏発起となり、グランドホテルより更に一層大なるホテルを建設せんとして、地を十一番舊東洋銀行跡にトシ、既に工事に着手せりと云ふ。⁵⁵⁾」

横浜居留地にあって、最も美しい建物と称賛されたこの新しいホテルは石造り二階建てで、外壁を赤煉瓦と漆喰塗りで仕上げ、イタリア・ルネッサンス様式の外観を有するもので、そのオープンは1898年（明治31）5月初旬のことであった。⁵⁶⁾

海岸通りに面した中央玄関の側には、檜を天井に張りつめ、意匠を凝らしたレストランが併設され、広々として落ち着いたバーには、ステンドグラスを通して採光がさすよう工夫がなされていた。寝室の内装もルネッサンス調で飾られ、宿泊者は暖房装置を自分で調整できるなど近代性を有した非常に贅をつくしたホテルであった。開業当初の部屋数は40室であったから、「グランド・ホテル」より収容人数は遥かに少なかったが、経営が軌道にのればすぐにでも増築する意図をレオン・ミュラールは持っていた。

東洋一の料理人との評判を欲しいままにしていたレオンは、実務面に非凡な能力をみせるベルギー生まれのデュウェット（L. Dewette）をパートナーとして選び、ふたりによる共同経営がとられることになったが、開業される前からホテルの成功は疑いなしとの噂が立つほどであった。

事実、雰囲気がよく清楚な寝室、ゆったりとしてくつろげるふたつのロビー、奇麗なタイルを敷きつめたホール、それに美味しく手の込んだ食事とあっては旅行者に歓迎されないはずもなく、経営は極めて順調な伸びを示していった。

これにすっかり気をよくしたレオンは、1900年（明治33）には15万円も

横浜居留地のフランス系ホテル（1863-1899）

の費用をかけ増・改築をし、翌年の夏にこの工事の竣工をみた。この時点でのホテルの規模は、間口14間に奥行き34間の広大なものになったが、この11番は498坪の敷地であったから、ほぼこの地所いっぱいには建設されたことになる。

好事魔が多いというが、やっと修繕がかなったばかりの1901年晩秋、隣の家からもらい火を受けてホテルは全焼する事態に見舞われた。1901年11月17日午前1時を少し回った頃、山下町海岸通り12番の中国人洋服店・鐘松甫方より出火し、たちまちの内にこの家屋を焼き尽した。細い小路を挟んで建っていた「オリエンタル・ホテル」は、最初の内こそ煉瓦壁に護られ延焼を免れていたが、かなり強い北風に煽られた火の手はホテル外壁に沿って伸び、まず軒や屋根部分を焦がし始めた。次の瞬間、最上階はあっという間もなく炎に包まれ、ホテルの内部は黒い煙が渦巻いた。

ここに寝ていた持ち主のレオンは、火災発生の直後に女中の天野ナカに起こされ、難を逃がれることができた。深夜の火災であったのにもかかわらず、宿泊客からは死傷者はでなかったものの、客を誘導していた天野ナカだけが、燃え落ちてきた建材の下敷きになって焼死した。ホテルは約25万円の損害をだしたが、この額の大半は保険で補填された。

この火災を報じた英字・邦字新聞の記事はいくつもあり、それらを比較してみると、細部で若干の記述の差異が認められるが、一紙だけを下に紹介しておこう。

「昨十七日午前一時二十分、横濱山下町海岸通十二番館洋服裁縫職清國人鐘松甫方より出火、折柄南北の風中々強烈にして火を煽りければ、隣家なる十一番館オリエンタル・ホテルに延焼し、火の手は更に風に煽られて、十二番館ストロム商會所有にしてホテルに近接せる倉庫に燃え移り同商會の店をも一甜にせんず有様なりしも、消防に必死となりて盡力せる結果、同三時四十分、鐘松甫、オリエンタルホテルの二戸全焼、

土蔵半焼にて鎮火せり。(一部略)⁵⁷⁾」

横浜の華ともいわれた瀟洒な「オリエンタル・ホテル」を火災で失ったミュラールは、これに挫けることもなくホテルの再建に乗りだした。新しいホテルの建設を手配し終わると、彼は一時フランスへ帰国し、1903年(明治36)4月16日に再び横浜に戻り、海岸通りに建築中のホテルを眺め安堵したのだった。

この年の秋に盛大な開業式がとり行なわれたホテルは、「オリエンタル・パレス」と称し、経営もミュラールとデュウェットと同じ顔ぶれであったが、この時からミュラールの甥・ジャン(Jean Muraour)が会計係として加わった。この新しいホテルは、居留地制度のなくなった後のものだが、ミュラール兄弟の追跡の上からはどうしても避けるわけにはいかないので、タイトルに合致しないが簡単に記述しておきたい。

② オリエンタル・パレス・ホテル

1903年(明治36)10月6日、大勢の招待客を招いて開業式が行なわれた新しい「オリエンタル・パレス・ホテル」(Oriental Palace Hotel)は、セメント・モルタル造りに赤煉瓦を組み込ませ、白と灰色の石で枠組みをとった、がっちりとした3階建てのものであった。1階に60人を収容できる食堂、ビリヤード室、バーなどを配し、二・三階には64の寝室を有していた。一方、地震の際に窓ガラスが壊れ、事故が起きないようにこれにワイヤを入れ込むなど細心の注意が施されたりして、施設面は前のホテルより一段と充実したものであった。⁵⁸⁾

海岸通り11番に建つこのホテルも、前と同じようにミュラール兄とデュウェットの共同経営になるもので、客あしらいが上手、洗練された料理をだすことで評判をとった。このホテルが新築され、20番には「グランド・ホテル」があったことから、海岸通りは散策する人たちの賑いの場となっ

た。

最も近代的な機能を備えたホテルと称賛されはしたが、バス付き寝室は全体の部屋数の3分の1程度であったから、現在のホテルとは到底比較することはできない。

「オリエンタル・パレス・ホテル」も先の㊸のホテルと同様に、ドイツ人のゼール (Richard Seel) の設計になった。ゼールは明治政府に招かれ来日した建築家で、東京裁判所などの設計すると、後に横浜に留まり露清銀行の建築などに携わった人物で、このホテルを完成させた1903年暮れベルリンへ去った。

1907年12月7日、長い間にわたってホテルを切り回していたパートナーのデュウェットが61歳で逝去したため、実務面で大きな支障をきたすことになったミュラール兄は、この時カンヌで「オテル・リュニヴェール」(Hôtel l'Univers) を経営していた弟のポーランに助力を救めた。

兄の依頼に応じた弟は、カンヌのホテルを処分し、永年住み慣れた横浜に1908年に再びやってきた。これ以降、11番のホテルはレオン・ミュラール夫妻、ポーラン・ミュラール夫妻やその子息たちで経営されるようになり、文字通りミュラール一族で固められたのであった。新しい陣営によるホテル経営は長くは続かなかった。またしても、このホテルはもらい火を受け崩壊する羽目に落ち込んだからである。

1909年 (明治42) 12月28日の午後7時30分頃、山下町13番地のオープンメール商会所有の小さな家屋から出た火は、すぐ隣り合っていた12番の木造家屋・梁部 (新聞記事の一部では山辺) 写真館をたちまち焼き尽し、9時頃には12・13番一帯の商社や倉庫を灰にしてしまった。⁵⁹⁾

この頃になるとホテルに付随して建つ倉庫が災に包まれ、ホテルそれ自体ももはや時間の問題と取りざたされた。しかし、ホテルは厚い煉瓦壁と防火扉とに守られ、また必死の消火活動によって、しばらくは炎上を免れていた。火勢はそのまま鎮まるかにみえてはいたが、3時間にもわたって

熱せられた壁面は、とても手を触れることができないほどになっていて、この高熱が内部を焦がし、窓枠などから煙が広がり、ホテル内部は想像を絶する騒乱の場に変った。それでも、ランチなどからの強力な放水が功を奏し、10時30分頃に東洋で最も人気があった「オリエンタル・パレス・ホテル」はなんとか焼上だけは免れ、山下町は大火から救われた。

この2日前の12月26日には、5番にあった大手の「クラブ・ホテル」がストーブの加熱から灰燼に帰し、また30日には「グランド・ホテル」でボヤ騒ぎがあるといったように、この年の暮れはホテルは受難続きであった。

再三にわたり自分のホテルを失ってきたレオン・ミュラールではあったが、気を取りなおしホテルの改修・再建に立ち上がった。しかし、前年フランスを旅行中に最愛の妻を失い、また「グランド・ホテル」の持ち主となり、長い間横浜で料理人の腕を振った弟が、「オリエンタル・パレス・ホテル」の火災騒ぎのあと帰国したこともあって、ホテル経営にかける情熱はかなり薄らいでいった。

弟・ポーランが帰国後に病を患い、1912年7月に65歳をもってカンヌで逝去した報を受けた兄・レオンは、その心労から健康を害し、フランスでの転地療養を強いられ、1913年（大正2）6月7日にフランス郵船「ポール・ルカ」号（Paul Lecat）に乗船し横浜を去った。7月16日に無事マルセイユに到着した彼は、すぐその足でカンヌへ向った。長途の旅の疲れが病身の彼に重くのしかかり、カンヌに着くとそのまま床につき、7月28日にここで息を引きとった。68歳であった。⁶¹⁾この1年前の7月15日に弟がこの地で亡くなっているのだから、奇縁といったものを感じないわけにはいかない。

レオンが去った後の「オリエンタル・パレス・ホテル」は甥のジャンにまかせられ、後に山下町179番の「オテル・ド・パリ」を経営していたコット（L. Cotte）が共同経営者となっていったが、他のホテルと同じ様に大震災でこれも廃墟と化した。

②③ オテル・ド・ジュネーブ

居留地26番には1892年から1897年にかけて、月極めで宿泊させるホテル「クラレンドン・ハウス」(Clarendon House)があった。この建物が取り壊わされ整地された後に、サルダの設計になる「オテル・ド・ジュネーブ」(Hôtel de Genève)が建てられ、1898年(明治31)に新規開業された。

建築家・サルダについてはすでに触れたことがあるが^{6,2)}。彼は「グランド・ホテル」新館、40番の「ライト・ホテル」の設計を手懸けた人物でもあった。「オテル・ド・ジュネーブ」の規模を伝える資料はないが、残された図から屋根裏部屋まで含め四階建てで、木骨石造りの工法がとられたホテルであったことが知れる。「ライト・ホテル」と実によく似た外観を持ち、この方から30室ほどの客室を有していたと思わせる。

「オテル・ド・ジュネーブ」は1911年(明治44)まで一貫してフランス人・デュボア(Jules Dubois)の手で経営が続けられたが、水町通りの落ち着いたホテルとして固定客の多い、横浜を代表する中堅のホテルであった。

1898年の居留地におけるホテルは13軒で、この内、「グランド・ホテル」、「オリエンタル・ホテル」、「ライト・ホテル」、「クラブ・ホテル」と「オテル・ド・ジュネーブ」の5軒が1900年代に入っても格のあるホテルとして認められていた。これらホテルのベッド数は合わせて550から600程度のものでしかなかったが、この程度の数で旅行者の需要は満されていたものとみえる。

1910年代に入ってから横浜でのホテル数は、大小あわせて平均14・15軒であったから、20年前と較べても大きな差はない。一方、日本式旅館の方は、1910年代に横浜に200軒ほどもあった。

1899年(明治32)7月17日、条約改正により居留地制度は撤去されることになった。この頃ともなると、居留地内には多くの日本商社も進出し、日本人街との区別はほとんどなくなっていただけに、居留地制度の廃止を喜ぶ特別な行事も提灯行列もなく、いつもとかわらぬ横浜であった。これ

により、関内居留地一帯は山下町と呼称されることになったが、地番の変更はほとんどなかった。つまり、居留地20番の「グランド・ホテル」は山下町20番、居留地11番の「オリエンタル・ホテル」は山下町11番となったわけで、現在の山下町60番を逆に旧居留地60番と読み変えて大きく誤ることではない。

横浜に居留地制度のあった幕末より明治32年までの約40年間に、ここに開かれたフランス系のホテルは上記の通りであった。もちろん、その全貌を明らかにできたとは思ってはいないし、ホテルより格下と一般にみなされる「イン」、「ハウス」や「ターバン」といった安宿については全く触れることもできなかった。

近年、横浜に関する刊行物が多くみられるようになり、その中にはホテルの開業等を解説したり、注記の型で記述したものも少なくない。しかし、これらの注記の多くは、従来刊行された書をそのまま引用しただけのもので、誤謬が極めて多いことを遺憾に思っていた。ここ20年ほど、横浜居留地内のホテルを調査してきたが、その内フランス人が関わりを持ったホテルを取りだしてみたのが本稿である。

横浜居留地におけるホテルは、ひとりフランス人が経営したものばかりでなく、イギリス人やドイツ人が所有したホテルも年度順に調べ終わっているので、いずれ全てを網羅し総合的に紹介する機会もあることだろう。

- 注 1) The North China Herald, 1860.3.10.
2) Spiess, Gustave. "Die Preussische Expedition nach Ostasien während der Jahr 1860-1862" (1864). p.164.
3) Eulenburg, Friedrich. "Die Preussische Expedition nach Ost-Asien nach amtlichen Quellen" (1864). zweiter Band. p.2.
4) Siebold, Alexander Fr. von. "Ph. Fr. von Siebold's Letzte Reise nach Japan 1859-1862" (1903).
5) Heine, Wilhelm. "Eine Weltreise um die nördlich Hemisphäre in Verbindung mit der Ostaiatischen Expedition in den Jahren 1860 und 1861" (1864).

横浜居留地のフランス系ホテル (1863-1899)

- 6) E. Satow. "Satow's Paper's : Diaries" (Oct.1, 1862).
- 7) The Japan Herald, 1864.6.25.
- 8) ibid. 1862.10.25.
- 9) ibid. 1863.9.26.
- 10) ibid. 1864.1.20.
- 11) ibid. 1864.5.21.
- 12) 拙稿「アルフレッド・ジェラルド」(『千葉敬愛経済大学研究論集』第32・33号)。
- 13) The Japan Herald, 1864.5.14, 1864.6.25.
- 14) ibid. 1864.10.29.
- 15) ibid. 1865.2.15.
- 16) 「横浜毎日新聞」明治5年2月13日。
- 17) The Japan Daily Herald, 1877.4.14.
- 18) ibid. 1881.1.21.
- 19) Weppner, Margaretha. "The Northern Star and the Southern Cross" (1875).
Bridges, E.S. "Round the World in Six Months" (1879).
- 20) "The Japan Gazette Hong List and Directory for 1875" p.20.
- 21) L'Echo du Japon, 1879.2.17.
- 22) The Japan Weekly Mail, 1880.6.19. The Japan Gazette, 1880.6.24.
- 23) The Japan Daily Herald, 1875.1.4.
- 24) Durand-Fardel, Laure. "De Marseille à Shanghai et Yedo" (1881).
pp.339-340.
- 25) Bird, Isabella. "Unbeaten Tracks in Japan" (1880).
- 26) 「横浜毎日新聞」(834号)。明治6年9月10日。
- 27) 拙稿「フランス郵船ニール号遭難」(『仏蘭西学研究』NO.11)。
- 28) The Japan Weekly Mail, 1873.8.23.
- 29) The Japan Daily Herald, 1878.1.4.
- 30) L'Echo du Japon, 1878.5.15.
- 31) The Japan Daily Herald, 1878.6.24.
- 32) Cotteau, Edmond. "Un Tourist dans l'Extrême-Orient" (1884). p.44.
- 33) L'Echo du Japon, 1881.12.31.
- 34) The Japan Weekly Mail, 1891.12.12.
- 35) The Japan Daily Herald, 1874.7.2.
- 36) L'Echo du Japon, 1875.5.19.
- 37) ibid. 1875.5.29.
- 38) ibid. 1875.6.26.
- 39) ibid. 1875.12.28.

- 40) The Japan Gazette, 1876.1.28.
- 41) The Japan Daily Herald, 1875.1.29.
- 42) L'Echo du Japon, 1877.1.4.
- 43) The Japan Daily Herald, 1878.6.29.
- 44) L'Echo du Japon, 1879.6.16.
- 45) Crow, Arthur H. "Highways and Byeways in Japan. (1883).
- 46) The Japan Daily Herald, 1880.7.8.
- 47) L'Echo du Japon, 1880.8.12.
- 48) ibid. 1880.10.11.
- 49) ibid. 1881.4.23.
- 50) ibid. 1881.6.14.
- 51) ibid. 1884.1.28.
- 52) "The Japan Directory, for the year 1888" p.86.
- 53) "The Japan Directory, for the year 1892" (Latest Informationの頁)。
- 54) The Japan Weekly Mail, 1894.11.24.
- 55) 「報知新聞」, 明治30年6月3日。
- 56) The Japan Weekly Mail, 1898.4.30.
- 57) 「報知新聞」 明治34年11月18日。
- 58) The Japan Weekly Mail, 1903.10.10.
- 59) ibid, 1910.1.1.
- 61) The Japan Gazette, 1913.7.31, 1913.8.2.
- 62) 拙稿「幕末・明治初年来日のフランス人建築家」(『千葉敬愛経済大学研究論集』第28号)。